The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中間言語における接続詞と接続助詞の切換え : ある英語母語話者を例に
Author(s)	橋本, 貴子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2004, 6, p. 139-155
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23234
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第6号（2004年3月）139-155

中間言語における接続詞と接続助詞の切換え
——ある英語母語話者を例に——

橋本　貴子

【キーワード】中間言語、接続詞、接続助詞、前件との隣接、派生用法

【要旨】

本稿は、前稿の接続詞と接続助詞のバリエーション関係を見直すことを目的に、接続詞の前件との隣接と用法という2つの観点からそれぞれの用例を分類し、切換えに関わる特徴を整理した。その結果、以下のことが明らかになった。

(1) 接続助詞と接続詞が置き換えられる隣接・基本用法の部分では、接続詞と接続助詞の切換えが親疎を軸に起こっており、《対疎》場面で接続助詞が増える。

(2) 接続詞の接続助詞に置き換えられない部分とした非隣接と派生用法の部分は、どちらも似た傾向があり、《対親》場面で多くなる。

この結果を発話の計画性や談話のタイプといったものとの関連づけて考察を行った。

1. はじめに

ある言語の習得過程の一断面としての中間言語では母語話者の発話とは全く異なる方法でスタイル切換えが行われる可能性がある。例えば、接続詞ダカラと接続助詞カラは、どちらも原因・理由を表す接続表現であるが、ある英語母語話者の日本語の談話を扱った拙稿（2002）では、その使用比率が《対親》場面と《対疎》場面で逆転し、スタイル切換えに関わっているという結果が出た。《対親》場面では接続詞ダカラがより多く現れたのに対し、《対疎》場面では接続助詞カラが多く現れたのである。さらに興味深いのは、この《対親》場面で接続詞が多く、《対疎》場面で接続助詞が多くなるという傾向は、原因・理由表現ばかりでなく、逆接の接続表現にも現れたことである。

ただし、前稿では形式のみを計数して比較したに過ぎず、実際に接続詞と接続助詞を接続表現のバリエーションと認定するには、それぞれが言い換えられるかどうかについて吟味する必要がある。本稿は、前稿で指摘した接続詞と接続助詞の切換えが、実際に言い換え可能な範囲で行われているのか、明らかにすることを目的とする。

そのために、前稿で取り上げたデータを次のように限定し、さらに切換えのあり方を整理することにする。

【1】前件と隣接している接続詞に限る

【2】接続助詞も接続詞も基本用法に限る（派生用法を除く）

また、このデータの再整理の過程で、言い換え可能な範囲以外の部分に、親疎を軸とした場面間のちがいがある場合は、なぜそのような現象が起こるのかについても考察する。1つの形式の内部に現れる位置関係や用法の偏りは、バリエーションとはいえないが、なんらかの意識的な操作が話者によって行われた結果であるという点では、切換えと言えるのではないかと考えるためである。

以下、本論の構成は次のとおりである。まず、§2 で資料とした談話データについて解説し、§3 で前稿の結果とその問題点を明らかにする。次に§4 で原因・理由、§5 で逆接の接続表現について、それぞれ隣接関係と用法の 2 つの観点から再整理を行い、接続詞と接続助詞を比較する。§6 では、原因・理由、逆接の両方の結果を合わせて考察を行い、§7 で今後の課題について触れることとする。

2. 資料

資料は大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室の SS コーパス・バージョン 1.0 の英語母語話者のデータを使用する。SS コーパス・バージョン 1.0 は日本各地の日本語方言話者と中級レベルの日本語中間言語話者のスタイル切換えの実態を把握しようと録音収集された談話であり、分析対象者の持つカジュアルスタイルとフォーマルスタイルを引き出すことにその目的がある。中間言語の分析対象者は日本に留学中の 20 代男性で、設定場面は相手が親しい友人か初対面の学生か・日本語母語話者か否かによる 4 場面である。さらに最も改まったスタイルが現れると考えられる日本語母語話者教師との場面をオプションとして加えた。

以下に拙稿（2002）から話者情報と談話情報を再掲する。表中の略号については、表 1 の EA や FC というのは話者を示す記号で、はじめの文字はそれぞれの母語を表し（E＝英語、F＝仏語、C＝中国語、J＝日本語）、後の文字は役割及び場面を表す（A＝分析対象者、C＝親しい友人；casual 場面、F＝初対面の人；formal 場面、T＝教師）。表 2 の《対 NNS 親》《対 NS 疎》というのは談話場面を示し、《対 NNS 親》は日本語非母語話者の親しい友人との場面、《対 NS 疎》は初対面の日本語母語話者と話す場面をさす。

〔表1　話者情報〕

	出身地	母語	年齢	日本語学習歴*1／居住歴	専門	職業(学年)
EA	アメリカ	英語	23-24	国で1年、来日後10ヶ月	スペイン語	学生B4
FC	フランス	仏語	23	国で3年、東京で1ヶ月、来日後10ヶ月	歴史、貿易	修士修了、学生
CF	台湾	中国語	27	国で主専攻として6年、来日後4ヶ月	日本語	学部卒、研究生
JC	高知県	日本語	21	0-18:高知県　18-21:大阪府	ロシア語	学生B3
JF	兵庫県	日本語	27	0-18:兵庫県　18-27:大阪府	日本語	院生D2
JT	山形県	日本語	42	0-18:山形県　18-24:東京都　24-42:大阪府	日本語	助教授

*1 日本語非母語話者の日本語会話のレベルについて、EAは談話収録の直前にOPIテストで中級の上と判定されている。FCはEAとほぼ同じレベル、CFは上級レベルと考えられる。

〔表2　談話情報〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開*1
対NNS親	EA－FC	対日本語非母語話者(親)	39分	EAが多く発話
対NS親	EA－JC	対日本語母語話者(親)	43分	二者ほぼ同量の発話
対NNS疎	EA－CF	対日本語非母語話者(疎)	40分	二者ほぼ同量の発話
対NS疎	EA－JF	対日本語母語話者(疎)	33分	JFが質問、EAが答える
対NS教師	EA－JT	対日本語母語話者(教師)	26分	JTが質問、EAが答える

*1 《対NNS親》では語学の教え方、《対NNS疎》ではゲームについてというように、《対NNS》の場合ではひとつの話題について長く話すことがあるが、対NS場面では話題がめまぐるしく変わった。

3. 問題の所在

3.1. 前稿の結果

まず、拙稿（2002）で指摘した EA の談話における接続詞と接続助詞の分布を示す。以下のデータは新たに録音テープを聴きなおし、接続助詞と接続詞の判定をやり直したもので、以前の数値と異なる部分がある。

〔表3　原因・理由の接続表現〕

		対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
接続助詞	カラ	14 (33.3)	12 (29.3)	20 (55.6)	49 (77.8)	22 (66.7)
接続詞	ダカラ	28 (66.7)	29 (70.7)	16 (44.4)	14 (22.2)	11 (33.3)

（　）内の数字は接続助詞と接続詞の比率を表す。

〔表4　逆接の接続表現〕

		対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
接続助詞	ガ	-	-	50	38	28
	ケレドモ	-	-	-	1	-
	ケド	16	20	-	-	1
接続詞	シカシ	-	-	4	-	-
	デモ	23	53	23	16	13
	ダケド	22	-	-	-	-
	ケド	-	1	-	1	-
	ガ	-	-	1	1	1
接続助詞		16 (26.2)	20 (27.0)	50 (64.1)	39 (68.4)	29 (67.4)
接続詞		45 (73.8)	54 (73.0)	28 (35.9)	18 (31.6)	14 (32.6)

（　）内の数字は接続助詞と接続詞の比率を表す。

表 3、表 4 からわかるのは次のようなことである。

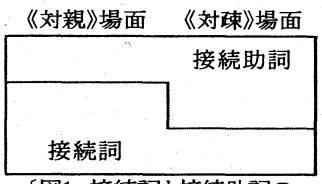
(1)　原因・理由の接続表現はカラとダカラという形式しかないのに対し、逆接にはいくつかのバリエーションがある。

(2)　逆接の接続詞は全場面で主にデモを用いているが、《対 NNS 親》ではダケドがバリエーションとして加わる。《対 NNS 親》にしか現れていないが、接続助詞ケドが《対親》場面でしか現れないこととも考え合わせると、ダケドを丁寧度の低い形式と考えているのかもしれない。ただし、次のような可能性も考えられる。

(a)　この談話は最後に収録したため、ほかの談話の収録との間の期間に接続詞ダケドを習得した。

(b)　話し相手である FC（ダケド使用 4 例）にアコモデートした。

(3)　図 1 に示すように原因・理由も逆接も、《対親》場面で接続詞が増え、《対疎》場面で接続助詞が増えている。接続詞と接続助詞の比率が親疎で逆転しており、切換えが行われている。



〔図1　接続詞と接続助詞の親疎による比率のちがい〕

(4)　接続詞と接続助詞の比率について、原因・理由では《対 NNS 疎》に両場面の中間的な傾向が見うけられるが、逆接にはその傾向がない。

ちなみに、接続助詞の直前に来る従属節末の丁寧形式の有無は以下のとおりである。

〔表5　原因・理由の接続助詞カラの直前形式〕

		対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
丁寧	カラ	-	-	20	49	22
普通	カラ	14	12	-	-	-

〔表6　逆接の接続助詞の直前形式〕

		対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
丁寧	ガ	-	-	49	38	28
丁寧	ケレドモ	-	-	-	1	-
丁寧	ケド	-	-	-		1
普通	ケド	16	20	-	-	-

原因・理由の接続助詞カラについては全場面で同じ形式が現れるが、《対親》場面で普通体に、《対疎》場面で丁寧体にすることで、場面間の切換えを行っていることがわかる。

逆接の接続助詞ガは、元々話しことばでは普通体と結びつきにくいという性質上、《対疎》場面でのみ使用されるのも当然と言えるが、接続助詞ケドは本来普通体にも丁寧体にも結びつくものである。しかしながら、このデータでは、ケドとガがほぼ相補分布をなしていると言ってもよく、ケドは《対疎》場面でほとんど現れない。しかし、「丁寧体＋ケド」や「丁寧体＋ケレドモ」が 1 例ずつあることから、《対親》場面で「普通体＋ケド」、《対疎》場面で「丁寧体＋ガ」という体系を経て、丁寧体がケド系接続助詞に結びつき始めたとい

う段階ではないかと考えられる。

3.2.　前稿の問題点

前稿ではバリエーションと認定できない部分、すなわち、切換えとは認められない部分も集計に含めたが、本稿ではそれらを再整理し、あらためて切換えの実態を分析する。具体的には、

〈1〉接続詞と接続助詞が相互に入換え可能でバリエーション関係にある場合とそうでない場合を整理する

〈2〉両者がバリエーション関係にある場合の、切換えの実態を分析する

また、〈1〉については、〈1.1〉接続詞の前件との位置関係　〈1.2〉基本用法か派生用法かという二つの観点から、切換えにかかわる特徴をさぐることにする。

〈1〉の相互に入換え可能でバリエーション関係にある接続詞と接続助詞の対とは次のような例である。

〔1a〕今日は子どもの誕生日ですから、早く帰ります。　〔みんなの日本語初級 I 第 9 課〕
〔1b〕今日は子どもの誕生日です。だから、早く帰ります。

〔2a〕日本の食べ物はおいしいですが、とても高いです。　〔みんなの日本語初級 I 第 8 課〕
〔2b〕日本の食べ物はおいしいです。でも、とても高いです。

このような例を取り出すためには、まず、〈1.1〉接続詞の前件との位置関係を整理する必要がある。原因・理由のカラとダカラを例にとり、前件を P、後件を Q とすると、接続助詞と接続詞の現れる位置は、次のように示すことができる。

接続助詞　…　P カラ、Q。
接続詞　　…　P。ダカラ Q。

接続助詞の場合は同一話者の発話の中で P と隣接しているのが普通であるのに対して、接続詞の場合は相手の発話を前件 P とすることや、前件 P と隣接していなくても使用することが可能である。例えば、

〔3〕A:あの人たち夏休みに 3 週間も沖縄に行っていたんだって。
B:だから、真っ黒に日焼けしているんだね。　〔蓮沼 1991 : 141〕

〔4〕わかりにくい。ボスの考えは。だから、ちょっと心配している。　〔対 NNS 親より筆者改〕

従属節末につく接続助詞と文頭に置かれる接続詞をバリエーションとみなすためには、〔1b〕〔2b〕のように接続詞が前件の文と隣接している必要がある。〔3〕〔4〕のように前件と隣接していない用例は接続助詞との置き換えが不可能であるため、バリエーションの範囲とはならない。そこで、接続詞は、隣接（〔1b〕〔2b〕タイプ）と非隣接（〔3〕〔4〕タイプ）に分類し、このうち前件に隣接しているものだけを接続助詞との比較対象とする。

次に〈1.2〉基本用法か派生用法かという観点について説明する。例えば、逆接の接続助詞とされるガ・ケドの用例の中には、逆接とは言いにくい、次のような例が含まれている。

〔5〕 昨日、銀座に行ったんですが、珍しい人に会いましたよ。 〔小出 1984:30〕

これは逆接という基本用法から発展した派生用法と言え、接続詞のシカシやデモにはない用法である。一方、シカシやデモにも話題の転換を行う派生用法があり、接続助詞に言い換えることができない。

〔6〕 さあ、おはいり。しかし、おまえさん、どこのネコだい。 〔佐竹 1986:184〕

このような派生用法は、お互いに置き換えることが難しく、接続詞と接続助詞をバリエーション関係にあると認定して比較する際には取り除く必要がある。

以上の点をまとめると図2のようになる。比較対象とするのはBとCの部分である。

	接続詞		接続助詞	
	派生用法	基本用法	基本用法	派生用法
前件と隣接	A	B	E	F
前件と非隣接	C	D		

〔図2 バリエーション関係となる部分〕

つまり、まず〈1.1〉接続詞の前件との位置関係が隣接か否かによって整理し、次に〈1.2〉基本用法か派生用法かに分類する。そして〈2〉そのうち前件と隣接し、なおかつ基本用法の範囲である接続詞（B）を、同じく基本用法の接続助詞（E）の数と比較する。

しかし、バリエーション関係とならない部分は切り捨ててしまうだけでよいのだろうか。

接続詞で前件に隣接しないものは、隣接するものに比べて、接続詞独自の働きをしているといえる。たとえば、談話レベルで、接続助詞が持たない談話標識としての機能などが加わってくると考えられる。隣接・非隣接の使用頻度が場面によって異なる場合、それは1種の切換えとは考えられないだろうか。

また、ひとつの形式の中の基本用法と派生用法の使用頻度が場面によって異なる場合も、論理性という視点で従来のバリエーション研究にはないなんらかの意味づけが可能だと考える。

以下、§4と§5で、原因・理由と逆接に分けて結果を示す。§4では、4.1.として接続詞に関して、前件との隣接と用法の観点から、4.2.で接続助詞の用法についてまとめる。続く4.3.では、接続詞と接続助詞の言い換え可能な部分について、切換えがあるのか否か検討する。次の§5も§4と同様の方法で分析を進めるが、逆接は複数の形式が現れているため、形式ごとのバリエーション関係についてもそれぞれ吟味する。

4. 原因・理由表現

4.1. 原因・理由の接続詞

4.1.1. 前件との隣接

接続詞が前件と隣接しているか否かは、前件の述語部分がEAの発話中の直前にあるかどうかで判断した。相手のあいづちが挿入されているだけの場合はEAの発話が途切れていない可能性があるため、隣接としたが、「あのー」「えっと」などのフィラーなどがあった場合は非隣接と考えた。

〔7〕（アメリカのレストランの値段について）

322EA：(省略)アメリカの　場合は　チップも　あります、えっと

323JF：はーはーはー

→324EA：だから、その　あとは、んー、ときどき、ときどき、3000 円、2500 円　　〔対 NS 疎〕

前件「アメリカの場合はチップもあります」とダカラの間に、JF のあいづち「はーはーはー」しかなければ隣接とするが、この場合はフィラー「えっと」があるため、非隣接とする。また、接続詞の受ける内容が段落など文よりも大きい単位の場合は非隣接とした。

以上の隣接・非隣接という観点によって接続詞ダカラの用例を分類しなおした結果を表 7 に示す。

〔表7　接続詞ダカラの前件との隣接〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
隣接	15 (53.6)	20 (69.0)	11 (68.8)	9 (64.3)	11 (100.0)
非隣接	13 (46.4)	9 (31.0)	5 (31.3)	5 (35.7)	- -

（ ）内の数字は隣接と非隣接の比率を表す。

表 7 からわかることは以下のとおりである。

(1) 全場面を通じて前件に隣接しているものが非隣接のものより多いことがわかる。

(2)《対 NNS 親》で非隣接が最も多く、《対 NS 教師》で全く非隣接が現れない。中間の 3 場面に関しては両者の割合がまちまちであるが、改まれば改まるほど前件に隣接した環境で多く接続詞が用いられるのではないだろうか。

(1)については、5.1.1. で逆接の接続詞とともに詳細に考察する。EA の非隣接のあり方は、用例〔3〕のように対話者の発言からなんらかの結論を引き出すというよりは、むしろ用例〔4〕のような間に挿入句があるものが多く、(2) は発話の計画性の問題だと思われる。つまり、《対 NS 教師》のように改まると、発話に対する注意度があがり、計画的な発話が行われるが、《対 NNS 親》のような注意度の低い場面では、思いついたまま口にする傾向が強く、倒置句やフィラーの挿入などが起こりやすいのではないかと考える。

4.1.2.　用法

用法の観点から接続詞ダカラを以下のように分類する。

①理由用法　　前件を原因・理由とし、後件にその結果が示されるもの（〔1b〕参照）

②非理由用法　前件が原因・理由、後件がその結果という関係になっていないもの

　　a　聞き手の正しい理解を得るための言い換え

　　b　中間言語的な拡張用法（ナゼナラ・ソレデ・ソウシタラなどに相当する）

③不明　　発話が途中でさえぎられ、不完全なもの

②aの「聞き手の正しい理解を得るための言い換え」とは次のような例である。

〔8〕

121EA：で、おれは、「あ、だ、だめですか」、彼女（英会話学校の上司）は 「あ、だ、だめじゃ、じゃないんですが、ちょっと 最初ですから、ちょっと ふつうの、あの、紹介する ほうがいいですよ。で、もし 紹介したあとで、えと、もし 時間が あれば、で、その、なんか 感じは、ちょっと、ちょっと 授業の 感じ、人の やりたい ことは そんな 文法だったら、する ほうが いいで

→ すよ。」と言った。だから、彼女の 言った ことは、わ、あの、おれ、おれ、ちょっと これは 新しいから、おれ、生徒に 紹介する ほうが いい。（FC：うん）で、この最初の 授業は、と、ふつうの こと しない ほうが いい かもしれません、かもしれない。 〔対 NNS 親〕

②ｂの中間言語的拡張用法には次のような例が含まれる。

〔9〕

102EA：〔省略〕新学期に、ん、じゅうぎょう［授業］ とりった、から じゅうぎょう とりったかったら［授業とりたかったら］、（JC：うん）えっと、（JC：7 月）今、帰る。（JC：ふーん）でも、帰り

→ たくない。（JC：ふーん）だから、で、ここで、ここで たくさん 学べるよ、（JC：ふーん）日本語に ついて。でも、アメリカに いる ときは、授業 とっても そんなに 学んで いない。

〔対 NS 親〕

〔10〕（フランス語を教える際に、友人の教師が日本語を使い、生徒からクレームがついたと聞き、）

103EA：なんで そんな こと 言った？ 生徒は、ほん、ほんとに 日本語、あの、フランス語 使おうと して いた？ （FC：そう｛笑｝）説明、文法の 説明は 絶対に ほかの、（FC：そう、そう思って）日本語 使って いいと 思う。あの、おれ、日本語を 学んで いて、あの、もし、ときど

→ き 英語で 説明は あれば、文法の 場合は いいと 思う。Wow、だから、彼女〔友人〕は困った？ 〔対 NNS 親〕

用例〔9〕は前件と後件が逆転しており、ナゼナラ、ダッテ相当と考えられる。用例〔10〕はソレデ相当の用例である。これらは、母語の干渉とも考えられるが、ほかの接続詞をまだ十分に使いこなせないがゆえに、ダカラの使用範囲が拡張しているとも考えられる。②ｂは母語話者の行わない表現であるという点では、②ａの言い換えと異なったものであるが、確実に②ａの言い換えの例だと考えられるものはわずかで（全２例）、ｂとの線引きが難しい用例が多かったため、非理由用法としてまとめた。

以上の分類枠によって原因・理由の接続詞を用法別に分類した結果を、表８に示す。

〔表8　原因・理由の接続詞の用法〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
理由	17	18	13	13	10
非理由	9	6	2	1	-
不明	2	5	1	-	1

表８からわかることは以下のとおりである。

(1) すべての場面で、理由用法が非理由用法を上回っている。

(2) 非理由用法は《対親》場面でその割合が高く、《対疎》場面で割合が低い。

改まれば改まるほど、非理由の用法は減る傾向にあると言える。EA のダカラの非理由用法に中間言語特有の拡張用法が多いことからも、《対親》場面で発話に対する注意度が低くなることが、非理由用法の増加に関係していると考えられる。

〔表9　位置と用法の関係〕

	隣接	非隣接
理由	53	18
非理由	6	12
不明	7	2

この結果は 4.1.1.の「前件との隣接」の結果と非常に似かよっている。隣接関係と用法は、ある程度関連性があるようである。表 9 に接続詞ダカラの前件との位置と用法の分布を示した。理由用法は隣接が多いのに対し、非理由用法は非隣接に多いことがわかる。

4.2.　原因・理由の接続助詞

本節では、用法の観点から接続助詞カラを次のように分類し、分析を行う。

①理由用法　　前件を原因・理由とし、後件にその結果が示されているもの(〔1a〕参照)、

②非理由用法　　後件となる結果が存在せず、前後の文脈からも後件が復元不可能なもの

③不明　　発話が途中でさえぎられ、不完全なもの

②の例は次のようなもので、松丸（2003）が扱っているものと同様の例である。

〔11〕

EA:Ever Quest 以外の　ゲームは　しないんですか。

CF:今　プレイステーションとか　まだ　ないですから、そのゲームしか　やれないんです。

EA:わかります。プレイステーション　買えば、プレイステーション 2 の　ゲームが　できますからね。

〔対 NNS 疎より筆者が要約〕

以下、表 10 に理由用法と非理由用法という観点によって接続助詞カラの用例を分類しなおした結果を示す。

〔表10　接続助詞の用法〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
理由	13	11	17	47	22
非理由	-	-	2	-	-
不明	1	1	1	2	-

ほとんどの部分が理由を示しており、非理由用法は用例〔11〕のほかに 1 例しかなかった。その他、白川（1995）にあるような行為要求表現と共起する、以下のような非理由用法はデータにはなかった。

〔12〕火曜日に返すから、ハンバーガー買うお金、貸してくれよ。

この結果から、非理由用法は現在習得途中の段階にあるのではないかと考えられる。ここ

では、理由用法か非理由用法かという用法のちがいが切換えに関与しているとは考えにくい。

4.3. 原因・理由の接続詞と接続助詞の比較

本節では、理由用法の接続詞のうち前件に隣接しているものと理由用法の接続助詞を比較する。表 11 にその結果を示す。結果は z 検定にかけ、有意差があるかどうか確かめた。

〔表11　理由用法隣接の接続詞と接続助詞〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
接続助詞　カラ	13	11	17	47	22
接続詞　ダカラ	11	14	10	8	10
z検定	0.577	-0.849	2.021*	7.437**	3.100**

**は1%水準で有意差あり　*は5%水準で有意差あり

表 11 からわかることは以下のとおりである。《対親》の 2 場面は誤差の範囲内であるのに対し、《対疎》場面でのみ有意差があり、接続助詞を使う確率が高いということである。但し、《対 NNS 疎》では、5%水準の有意差しか出なかった。

接続詞の用例のうち、接続助詞に言い換えられないものとして除いた非隣接や非理由用法は《対親》場面で多くなる傾向が見られたため、その部分を除くと接続詞ダカラは全場面でほとんど差がなくなった。結果、接続助詞カラの《対疎》場面での多さが際立ったといえる。《対 NNS 疎》は《対疎》場面ではあるが、もともと接続助詞カラが多いわけではなく、中間的な傾向があった。初対面にも関わらず、打ち解けて話し、双方の発話量がほぼ同じだったことなどが要因と考えられる。

5.　逆接表現

5.1.　逆接の接続詞

5.1.1.　前件との隣接

逆接の接続詞についても、原因・理由の接続詞と同じ分類方法で隣接と非隣接に分けた。逆接の接続詞全体の結果を表 12 に、各形式の結果を表 13 に示す。

〔表12　逆接接続詞の前件との隣接〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
隣接	20 (44.4)	10 (18.5)	10 (35.7)	10 (55.6)	10 (71.4)
非隣接	25 (55.6)	44 (81.5)	18 (64.3)	8 (44.4)	4 (28.6)

(　) 内の数字は隣接と非隣接の比率を表す。

〔表13　接続詞各形式の前件との隣接〕

		対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
シカシ	隣接	-	-	1	-	-
	非隣接	-	-	3	-	-
デモ	隣接	7	9	8	9	9
	非隣接	16	44	15	7	4
ダケド	隣接	13	-	-	-	-
	非隣接	9	-	-	-	-
ケド	隣接	-	1	-	1	-
ガ	隣接	-	-	1	-	1
	非隣接	-	-	-	1	-

表 12、13 からわかることは以下の 3 点である。

(1)《対親》の 2 場面と《対 NNS 疎》で非隣接が多く、《対疎》場面の《対 NS 疎》《対 NS 教師》では、隣接が多くなっている。

(2)《対 NNS 親》における非隣接の割合は《対 NS 親》や《対 NNS 疎》に比べるとそれほど高くない。

(3)《対 NNS 親》でのみ現れるダケドは《対親》場面であるにも関わらず、隣接のほうが多くなっている。デモが《対親》場面で非隣接が多くなっているのとは対照的で、(2)の結果は、ダケドの影響であることがわかる。

親疎間の切換えではなく、《対 NNS 疎》が《対親》場面と同じ結果になったのはなぜなのだろう。《対 NNS 疎》は二者ほぼ同量の発話を伴った談話であったが、《対 NS 疎》《対 NS 教師》はインタビューに近い形式であったことが関係していると考えられる。発話への注意度との問題だとも考えられるし、接続詞の談話標識としての一つの機能だと言われる発話権の維持や取得の問題と関わっているのかもしれない。

ダケドが隣接で多くなることについては、「ダ＋ケド」というダケドの成り立ちがかかわると考えられる。デモやシカシが接続助詞とは全く異なる形式なのに対し、接続助詞と共通部分を持つダケドは接続助詞に近い現れ方（つまり隣接が多くなる）をするのではないだろうか。カラとダカラにも同様の関係があり、事実、ダカラは全場面で隣接が非隣接を上回っていたことを考えあわせると、図 3 のように整理できる。

	接助	接続詞	
	隣接のみ	隣接多	隣接少
原因理由	カラ	ダカラ	
逆接	ケド ガ	ダケド	デモ シカシ

〔図3　隣接の多寡と語形との関係〕

5.1.2.　逆接の接続詞の用法

用法の観点から逆接の接続詞を以下のように分類する。

①逆接用法　　前件と後件の間に否定的な関係が見出せるもの。以下のようなものを含む。

a　問題Aは難しい。しかし、問題Bはやさしい。〈対比関係〉

b　花子は転んだ。しかし、すぐ起き上がった。〈否定的継起関係〉

c　子供が生まれた。しかし、女の子だった。〈否定的累加関係〉

d　花子は中学生だ。しかし、1人で旅行できる。〈逆接関係〉　（佐竹1986）

②非逆接用法　前件と後件に否定的な関係が見出せないもの

a　話題の転換（〔6〕参照）

b　中間言語的な拡張用法

③不明　　発話が途中でさえぎられ、不完全なもの

原因・理由の場合と同様、②a話題の転換と②b中間言語的な拡張用法は、以下のように分類困難な例があったため、②非逆接用法としてまとめておく。

〔13〕（日本での英語の教え方について）

087EA：（省略）初級は　ちょっと、日本語で　ちょっと　話さなきゃ　いけない。でも、ふつうは　おそ

→　い　英語で　話す。うん、でも、ちょっと、それに　ちょっと、あの、それに　ついて　話したい。

その　仕事。　〔対 NNS 親〕

接続詞を逆接用法と非逆接用法に分けた結果を表 14、15 に示す。

〔表14　接続詞の用法〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
逆接	30	36	17	18	11
非逆接	12	15	11	-	2
不明	3	3	-	-	1

〔表15　接続詞各形式の用法〕

		対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
シカシ	逆接	-	-	3	-	-
	非逆接	-	-	1	-	-
デモ	逆接	14	35	13	16	11
	非逆接	9	15	10	-	1
	不明	-	3	-	-	1
ダケド	逆接	16	-	-	-	-
	非逆接	3	-	-	-	-
	不明	3	-	-	-	-
ケド	逆接	-	1	-	1	-
ガ	逆接	-	-	1	1	-
	非逆接	-	-	-	-	1

表 14、15 からわかることは、以下のとおりである。

(1) すべての場面で基本用法である逆接用法が多い。

(2)《対 NS 疎》《対 NS 教師》では非逆接用法がほとんど現れていない。

(3) 形式別に見てもすべての形式で逆接用法が多くなっている。

(2) は 4.3.や 5.1.1.で述べたような談話タイプの影響によるものだと考えられる。非逆接用法が現れるのは、双方が対等に発話している《対 NNS 親》《対 NS 親》《対 NNS 親》で、インタビュー形式の《対 NS 疎》《対 NS 教師》ではほとんど現れない。インタビュー形式の場合、質問を受ける側である EA が話題を転換する必要はまずないからである。

〔表16　位置と用法の関係〕

		隣接	非隣接
デモ	逆接	36	53
	非逆接	5	30
	不明	1	3
ダケド	逆接	11	5
	非逆接	1	2
	不明	1	2

(2) については隣接の結果と傾向が似通っているが、(1) (3) は逆接用法が主流であることを示している。

表 16 に原因・理由のときと同様、前件との位置と用法の関係を示す。デモは 5 場面すべての結果を合わせた傾向だが、ダケドは《対 NNS 親》のみの結果である。デモとダケドに共通するのは、4.1.2 のダカラの結果と同様、非逆接用法では非隣接が多いことである。相違点は本来用法である逆接用法の中の隣接と非隣接の出現頻度で、デモは非隣接が多いが、ダケドは隣接が多い。これは、すでに 5.1.1.で指摘済みであるが、逆接用法のみという限定を加えても同様の結果が出ている。

5.2.　逆接の接続助詞

本節では、用法の観点から逆接の接続助詞を次のように分類し、分析を行う。

①逆接用法　　前件と後件の間に否定的な関係が見出せるもの。(〔1a〕および 5.1.2. 参照)

②非逆接用法　　前件と後件の間に否定的な関係が見出せないもの。以下のすべてを含む。

a　昨日の話ですけど、どうなりました。〈主題話題の提示〉

b　東京には 23 の特別区がありますが、千代田区はその一つです。〈補足説明〉

c　昨日銀座へ行ったんですが、珍しい人に会いましたよ。〈前置き〉

d　夜分遅く恐れ入りますが、太郎君いらっしゃいますか。〈言語行動への注釈〉

(小出 1981)

③不明　　発話が途中でさえぎられ、不完全なもの

②の非逆接用法の談話例を以下に挙げる。

〔14〕

153JF:どんな　授業を　とって　いますか。

→154EA:えーと、全部の　授業は　日本語、ちょっと、と、関係な　授業なんですが、えっと、例えば、漢字の　授業を　とって　いて、っと、文法の　授業も　ありー、新聞　読むの　授業も　あります。　〔対 NS 疎〕

小出 (1984) は前提用法について詳細な分類を行っているが、本稿では逆接や対比関係が少しでも見出されるものは基本用法とし、それ以外をすべて派生用法と考えた。また、発話が未完成なために判定困難なものは不明とした。表 17 に結果を示す。

〔表17　接続助詞各形式の用法〕

		対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
ガ	逆接	-	-	35	23	21
	非逆接	-	-	15	14	7
	不明	-	-	1	-	-
ケレドモ	逆接	-	-	-	1	-
ケド	逆接	7	9	-	-	1
	非逆接	9	11	-	-	-

表 17 からわかることは以下のとおりである。

(1)《対疎》場面で用いられる接続助詞ガは逆接用法が多い。

(2)《対親》場面で用いられる接続助詞ケドは全体的に数が少ないが、逆接用法と非逆接用法がほぼ同数であった。

非逆接用法の数は《対疎》場面でもかなりあるが、逆接用法との比率を考えると、《対親》場面でのほうが大きい。

5.3.　逆接の接続詞と接続助詞の比較

3.2.の図 2 で示したように隣接の逆接用法に限って、接続詞と接続助詞を比較する。結果は表 18、19 のとおりである。

〔表18　逆接用法隣接の接続詞と接続助詞〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
接続助詞	7	9	35	24	22
接続詞	17	9	7	10	8
z検定	-2.887**	0.918	4.881**	4.944**	3.896**

**は1%水準で有意差あり　*は5%水準で有意差あり

〔表19　逆接用法隣接の接続詞と接続助詞の各形式〕

		対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
接助	ガ	-	-	35	23	21
	ケレドモ	-	-	-	1	-
	ケド	7	9	-	-	1
接続詞	シカシ	-	-	1	-	-
	デモ	6	8	5	9	8
	ダケド	11	-	-	-	-
	ケド	-	1	-	1	-

表 18、19 からわかることは以下のとおりである。

(1)《対疎》場面では接続助詞が接続詞より多く現れている。

(2)《対親》場面では接続助詞があまり現れず、《対 NS 親》で同数、《対 NNS 親》では逆に接続詞が多く現れている。

(3) 形式別の結果を合わせてみると、《対 NNS 親》で接続詞が増えるのは、ダケドが加わるためであることがわかる。接続詞デモと接続助詞ケドだけを比べてみると、《対 NS 親》の結果と同様、若干接続助詞ケドが多いものの、ほぼ同数といえる。

《対 NNS 親》《対 NS 親》《対 NNS 親》では、非隣接の接続詞が多かったため、比較対象となる接続詞がわずかになったことが、結果に大きく影響している。

《対疎》場面では、接続詞デモと接続助詞ガという 2 つのバリエーションのうち、圧倒的に接続助詞ガが選ばれる率が高いことがわかる。しかし《対親》場面で使われる接続助詞ケドには接続詞デモを圧倒するような傾向はない。《対 NNS 親》で現れる接続詞ダケドと比較しても、ダケドのほうが多い。

6. まとめと考察

本稿では、接続詞と接続助詞の現れ方について、接続詞の前件との隣接と用法という 2 つの観点からそれぞれの用例を分類し、切換えに関わる特徴を整理してきた。§4、5 で明らかになったことをまとめると以下のようになる。

(1) 接続助詞と接続詞が置き換えられる隣接・基本用法の部分では、接続詞と接続助詞の切換えが親疎を軸に起こっており、《対疎》場面で接続助詞が増える。

(2) 接続詞の接続助詞に置き換えられない部分とした非隣接と派生用法の部分は、どちらも似た傾向があり、《対親》場面で多くなる。

(3) 接続助詞の派生用法の部分については特に切換えに関わるような現象は見られなかった。原因・理由のカラの派生用法は習得途中にあり、ほとんど現れなかった。逆接の派生用法は多く現れてはいたが、全場面ほぼ同様で、接続詞のような傾向はなかった。

このうち (1) と (2) には発話に対する注意度、発話に対する計画性がかかわっていると考えられる。改まり度の高い《対疎》場面では、発話に対する注意が向きやすく、あらかじめ計画性を持って発話が行われる傾向が強い。それが、接続助詞が増えることにつながったと考えられる。逆に、《対親》場面では、倒置句が多くなるために非隣接が多くなったり、本来用法からはずれた派生用法が増えたりする。この 2 者はより話し言葉的で、くだけた印象を受けるという共通点が根にあり、発話に対する注意度の低さから来るものだと考えられる。

また、談話のタイプが関係している可能性もある。発話量が同程度の談話とインタビュー型の談話の違いは、発話権の維持・取得といった別の談話標識的機能を接続詞が担うか可能性があり、本来的な使われ方と異なったものが多く現れる要因となりうる。

接続助詞が《対疎》場面で多く選択される要因としては、中間言語話者特有の動詞の語尾変化の問題がからむ可能性を指摘しておきたい。接続助詞直前の従属節に関して、《対疎》場面ではすべて丁寧体、《対親》場面ではすべて普通体を使用しているが、丁寧体が接続助詞と結びつきやすいというような性質があるのかもしれない。より複雑な語尾変化を伴う普通体は文を切って、接続詞でつなごうという意識がないとはいいにくい。

7. 今後の課題

・日本語母語話者や他の中間言語話者との比較が必要であろう。個人差なのか中間言語話者特有の傾向なのか、また英語話者特有の傾向なのかはっきりしない。

・ダケドがデモとバリエーション関係にある場面では、非常に興味深い結果が出たが、1場面にしか現れていなかった。また、4 例しか現れなかったシカシもここにどういう力関係を見せるのか興味深い。複数の形式を習得する過程でその体系がどのように形作られ、また変化していくのかを知るためにも、縦断的な研究の必要性が感じられる。

【参考文献】

李吉鎔（2002）「韓国語母語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』4　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

———（本号）「中間言語話者の原因・理由を表す表現の切換え—切換えと表現形式の習得の関係について—」『阪大社会言語学研究ノート』6　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

加藤薫（1991）「逆接」の接続詞についての一考察——「しかし」系接続詞を中心として」『国語学研究と資料』第 15 号

———（1995）「“原因・理由”を受けない「だから」——「だから」の主体的側面の突出——」『早稲田日本語研究』3

クワンチャイ，セークー（1999）「会話における接続詞の「でも」について」『日本研究教育年報』3　東京外国語大学日本課程編

小出慶一（1984）「接続助詞ガの機能について」『アメリカ・カナダ 11 大学連合日本研究センター紀要』7

甲田直美（2001）『談話テクストの展開のメカニズム：接続表現と談話標識の認知的考察』風間書房

小暮律子（2002）「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』5 号　第二言語習得研究会

小西いずみ（2000）「東京方言が他地域方言に与える影響——関西若年層によるダカラの受容を例として——」『日本語研究』第 20 号　東京都立大学日本語研究会

佐久間まゆみ（2002）「接続詞・指示詞と文連鎖」『日本語の文法 4 複文と談話』野田尚史・

益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則編　岩波書店
佐竹久仁子（1986）「「逆接」の接続詞の意味と用法」宮地裕編『論集日本語研究（1）現代編』明治書院
白川博之（1995）「理由を表さない『カラ』」仁田義雄編『複文の研究（上）』くろしお出版
橋本貴子（2002）「英語母語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』4　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
蓮沼昭子（1991）「対話における「だから」の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4
浜田麻里（1995）「トコロガとシカシ・デモなど――逆接接続詞の談話における機能――」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版
松丸真大（2003）「原因・理由を表す接続助詞の切換え」『阪大社会言語学研究ノート』5　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
松丸真大・辻加代子（2002）「東京下町方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』4　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

はしもと　たかこ（大阪大学大学院研究生）
takako0987@hotmail.com